

臨床社会学の方法

(7) ポジショナリティ—対人援助と民主主義—

中村 正

はじめに

社会臨床の視点は、個人が感じる苦悩、体験としての苦勞、何らかの生きにくさの課題をみつめ、そこに社会の責任や課題を問う。支援のための実践は、ミクロな関係性と日常環境をも対象にするので臨床社会的な構成として位置づける。臨床のテーマが社会問題としての側面をもつことの定義づけを行う社会倫理的なテーマ、当事者たちとの権利擁護の課題の協働した発見、対人援助実践者の倫理と仕事のしやすさを統合すること等が含まれる。

これまで「臨床社会学の方法」として関係性の病理をみるために必要なことを扱ってきた。(1)暗黙理論(第13号)、(2)ガスライティング(第14号)、(3)動機の語彙(第15号)、(4)ジェンダー臨床(第16号)、(5)日常行動理論(第17号)、(6)共軛関係(きょうやくかんけい) -二つのIP論-(第18号)である。第7回目となる今回は、論じられることの少ない「対人援助と民主主義」のことを考えるために、ポジショナリティ(立場/立ち位置)をとりあげる。

1. 「どうして学校に行っていたのか」 -不登校の調査での「問い返し」

不登校の生徒が通うフリースクールで調査をしている院生がいる。どうして学校に行か

なくなったのか(あるいは行けなくなったのか)を調べたいと思っていた。ところが逆に生徒に聞かれた。「お兄さんはどうして学校に行っていたのか」と。調査の問いがはらむ前提が問われた。学校に問題なく通っていた人は答えることに窮するだろう。この「問い返し」は調査者の立ち位置を問う。不登校を問題視するあなたは誰かと。

同じようなことは他にもある。同性愛者に「どうして同性が好きなのか」と問うことも同型的な問題をはらむ。異性愛者にどうして異性が好きなのかと問うても返事しにくいだろう。特定の彼や彼女が好きなの理由は言えるが、カテゴリーとしての異性が好きなのはなかなか説明しにくい。あるいは、どうして外にでずにひきこもっているのか、夫に暴力を振るわれていたのにどうして逃げなかったのか、いじめられている子どもにどうしていじめかえせなかったのか、性的な暴力を受けるようなそんな男にどうしてついていったのか等と質問することは当人を追い詰める。これらは被害者非難につながる問いだ。二次加害ともなる。

調査だけではなく臨床も含めて考えると、そのように事態が進行していった微細な人間関係に宿る課題を問うことそれ自体が緊張に満ちたものであることがわかる。しかし、もちろん聞く側の問い方に配慮はいるが、それでも質問をしなければならぬ場合もある。聞きたいと思うこと、知りたいと思うことも

多いからだ。その際に、調査者の立ち位置を鋭角に批判すると問いがでてこなくなる。そうになると調査であれ臨床であれ、持続する対話にならない。問うべきではないという封殺のように当事者から指摘されることになってしまう。それはそれで別の問題も生じ、事態が前へとすすまない。とはいえやはり不躰な問いかけは他者を傷つける。このあいだで逡巡することが多い相談の場面では、問わず語りに話しをしながら方向性を探る協働的な対話のようになることが多い。もちろん当人のもつ力に依拠するとはいえ臨床や支援でも問題解決に向かうとなるとある指向性をもつので一様ではない。さらに調査は方向性をもった意図があるので葛藤が高まる。

したがって、どんな関係性のもとで、どこに向かう問いとして、それは何を目的にしているのかが大切となる。「対話が開かれていく問い」となるといい。特に他者が知りたいと思うことの多くは、当事者がなかなか語り得ないこと、語りにくいこと、封印していること、行動化したことの背景等を対象にする。場合によってはトラウマ的体験であることもある。言語化しにくい体験を聞くという作業はいかにすれば実りが多くなるのだろうか。逸脱行動を対象にする場合においても、動機理解という取り調べるなコミュニケーションではなく、行動化の過程を協働して振り返りながら、動機を語る語彙を豊かにしていくことになる。

こうして、語りにくいことを言葉にするコミュニケーションには相当な時間と労力が要ること、そしてそれと同じ程度に他者の声を聞こうとする者にも相当な準備と素養が求められることがわかる。その両者のあいだを特徴づける言葉が欲しい。

一般に、問われる立場にある者と調査する者の関係性は非対称である。多くの場合、問われる側は少数者である。説明を要請される者は弱い立場の者である。「問い返し」はこの不均衡を突き上げる。たじろぎながらもしかしなお聞いてみたいことがあるので、問う側はさらに努力を重ねる。こう考えてみると、あいだにあって逡巡するプロセスこそが大切なのだと思う。この点を把握するのがポジショナリティ論であり、広くいえば対人援助と民主主義である。

2. ポジショナリティ論として

聞く者の立場や立ち位置については社会学や人類学では常にテーマとなってきた。次のように定式化されている。「調査者は社会によって与えられた特定の『位置/立場』(position)から見る、そして、書く。ポジショナリティ(立場性)とは、誰が、どこから、どう見る・書くのかを問いかける概念である」。そこには「傷つきやすい観察者」もいるという。「調査地の人間関係に巻き込まれ、時に翻弄される、そしてその姿を隠すことのできない、脆弱な存在である。・・その身を眼前の現実さらすこと、傷つくかもしれないところに出て行くこと、その被傷性(vulnerability)にも、エスノグラフィーは対面する」という(『現代エスノグラフィー-新しいフィールドワークの理論と実践』藤田結子・北村文編、新曜社、37頁)。

さらされる立場に身を置くことを引き受けるという。上から視線の調査を批判するだけではないのだ。ポジショナリティ(立場性)論のもつ振幅の広さが理解できる。

また、トラウマの研究と臨床においても同じような問いかけがなされてきた。宮地尚子さんがポジショナリティについて言及している(『環状島=トラウマの地政学』宮地尚子、みすず書房、2007年)。

トラウマ被害を受けた人の相談や支援に関わる人たちにとって被害者とは距離が縮まらない場面もあり、「支援者はそれを必ずしも自分にひきつけて受け取る必要はない。反撃したり、立ち去ったりせず、ただそばに居続けて、感情の強度を感じ取ればよいと思う。それはとても困難なことであるが、とても重要な姿勢である。」

(143頁)、「ポジショナリティの問いかけにおいて重要なのは、問う側も問われる側も『全面的同一化』の幻想や願望を持たず、互いの他者性を認め合うこと。批判されても全面的に否定されたと考えず、直ぐにその場から立ち去らないこと。健全な『部分的同一化』を行ないながらも強度や『一部圧倒性』を否定せず、『一部了解性』をも抱え込むこと。そして、問いかけがなされるかぎりそこにはコミュニケーショ

ンが存在することを肯定的に捉えることである」(150頁)と。

そしてこう結論づける。「ポジショナリティの問いは、そういう自省を迫る。人はすべてを知ることにはできないから、無知そのものが罪なわけではない。ただ知識の圧倒的な非対称性は構造的暴力をもたらす。発話する人間は、少なくとも自分が無知であることを知っているべきだし、知らないで話してはいけない瞬間もあることをある程度は知っているべきだろう」(145頁)と。

無知への反省、非対称性のなかで発現させてしまう暴力的な問い、発問する側の責務等がポジショナリティ論から浮かび上がる。くだんの院生も予期しない「問い返し」をされ、感受的な彼は被傷した。問うた生徒に教えられたのだ。しかし不登校がそう数多くない選択であり、学校のあり方の幅を広げるためにも聞くべきことがたくさんあると思ひ、問い方を吟味している。そのあいだで逡巡しながら調査する者とされる者の関係を、協働する不登校理解へと変えていく努力を続けている。それは、いったい何からの不登校なのか、そもそも不登校という名づけはどの程度妥当するのだろうか、生徒が自生的にもつ学習理論はどのようになっているのか、生徒にとっての学びの保障はどうあるべきなのか等と。

言葉にならない、社会との不具合はまずは症状や行動として表出される。それを読み解いていくのは「徴候の知」といえる。「臨床の知」はすでに相談や支援との相関がみえるが、それ以前の知である。コミュニケーションの仕方としてこの症状や行動がある。ひきこもる、学校にいかない、自傷するという場合もあるだろうし、やるなといわれたことをやる、逸脱する、暴力を振るうという場合もある。無気力、無関心、無感動にもなる。何かに耽溺することもある。ファンタジーのなかにいきることもある。生きる環境とのいろんな不具合のかたちがあり、臨床や支援に関わる者は人々の苦悩や苦労をとおして、関係性について呻吟する様相に触れることになる。

3. 体験を語ることと聞く力の協働

当事者研究が重視されることもあり、やはり体験した者の言葉に学ぶことが大切だ。臨床家の多くは自分史とのすりあわせをしながらその分野に関心をもっている。たとえばいじめ問題。いじめる側といじめられる側には圧倒的な非対称性があり、そのことを精神科医の中井久夫さんが「いじめの過程」として考察している。自らの「いじめられ体験」をもとにしているのが臨場感がある。「孤立化、無力化、透明化」の諸段階があるという(中井久夫「いじめの政治学」『アリアドネからの糸』1997年、みすず書房)。その概要を紹介しておきたい。

最初は孤立化である。標的化ともいえる。いじめられるに値する対象だというキャンペーンが展開される。たとえば、いわれのない汚れ、美醜、癖等がとりあげられる。被害者もいじめられても仕方がないという諦念へと至ることがある。被害者化である。被害者なのに、加害者と傍観者を勇気づけ、気を配り、警戒的超覚醒状態に陥る。

次に無力化がある。被害者が加害者の行動よりも自分の振る舞い方。おのれの内心の動きへと眼をむけさせる作用であり、いじめに飼ひ慣らされていく。マゾヒスティックになる被害者の行動をみて加害者は被害妄想的になるという逆転現象がある。

そして最後は透明化である。ここにはいじめを肯定する大人の論理が荷担する。たとえば「子どもの世界のことで、自分もいじめられて大きくなった、子どものためになるだろう、あいつに覇気がないからだ」という二次加害のことである。被害者は孤立無援になる。そうなると加害者との関係だけが内容のある関係になっていく。空間は加害者の存在に満ち、加害者の眼が偏在する。いじめの時間はより苦痛に長く感じる。加害者との共存・共在で暴力を振るわれなければ恩寵のように感じてしまう。感情的に隷属することになる。

しかし、同じ加害者のなかに隷属し共存していても身体は硬直している。そうしたことに周囲が気づく必要性があるという。いじめられているのではないかと聞くと頑なに否定するか家族に暴力を振るうこともある。子どもからすると何をいまさらという気持ちもある。自分のこ

とは自分で決めるという最後の主体性やイニシアチブ感覚を大人の介入によって明け渡したくない。自分のなかにある最後のパワーは喪失感を味わいたくないという意識である。結果として被害者の罪意識が増大することもある。中井さんは「奴隷化と罪人化」という。被害者が命がけで調達した金品をみるも無残に浪費する。被害者の献身的行為も無駄になる。「出口なし的な状況」に追い込まれるという。だからいじめは単純にやり過ぎせるものではなく、暴力であることが語られている。

体験を言葉にしていく作業をとおして現象が整序され、当人の経験へと統合されていく。関係性の動態がみえてくるようだ。動きがみえてくるとその要所要所で何をなすべきなのかの手がかりも得られる。とはいえ大半の当事者はこんなに整序されていない、混沌とした意味の諸断片の渦中にある。そしてさらに必要なことは加害の言語化である。こちらにもさらに困難がある。

こうした過程にあるので、まだまだ渦中にある生徒の「問い返し」は相当に考えられた「反発」あるいは無意識の防衛的な反応であるかもしれない。自らに起こった事態の説明だけではなく、自らを不登校へと漂流させた力の背景を理解したいという問いでもあるのだろう。とするとそれは社会のもつ課題を拓く「問い返し」となる。聞く側はそれに「共振する」ことで、社会の方へと課題を振り分ける力も要る。こうした共振力が他者の声を聞く者の責任として求められるのだろう。守秘義務を遵守することだけではなく、職業倫理の、とくに権利擁護の課題はこうした経過において発信することと統合されていくべきなのだろう。

他にも関係性をとらえた理論はある。DVの被害者がそこに巻き込まれていく過程をとらえたレノア・ウォーカーの「被殴打女性症候群 battered woman syndrome」、逮捕された銀行強盗の犯人とそこで人質となった女性が生き延びる切迫した過程で形成した密度がその後結婚へと発展したことで関心を持たれたストックホルム症候群、日本型の母子関係に典型的な自らを犠牲にして息子に献身することで相手を拘束する様を把握したモラルマゾヒズム、カルトによるマインドコントロール等、訴求しあう相互関係に根ざして巻き込まれていく過程を

とらえたアプローチがある。被害者非難にならないような関係性把握のロジックを探ることもまた理論的な権利擁護の方途だと思う。どうして逃げなかったという問いではなく、拘束する関係性を解説する言葉へと架橋することは聞く側の理論構築への責任である。これが対人援助と民主主義の関わりである。

加害者臨床においても同じような責任がある。そうした作業として、「殴る男—親密性の変成に向けて」(市野川容孝他編『身体をめぐるレッスン第4巻—交錯する身体』岩波書店、3-28頁、2007年)を書いた。また、言語的な分析については(中村正「DV—加害者をどうするのかという問題が問いかけること—」『現代のエスプリ』第441号、至文堂、43-51頁、2004年)でも試みた。加害の声をきちんと社会に届ける仕事もまた意義のあることだと思う。それほどに加害の声は聞こえにくく、手立てをとらないと中和化され、消えていくからだ。

加害の声は聞こえなくなる背景には、社会の側に加害との共犯性や連続性があるからだ。他者への暴力をふるっている自分に気づくことは難しい。いつ何時交通事故を起こすかもしれない、子どもや高齢者を虐待しているかもしれない、ハラスメントをしているかもしれないと思うほどに対人暴力のテーマが増えてきたし、暴力を受けたと思う主観に依拠しているんな対策がすすんでいる対応策も不安をつくりだす。関係を歪ませる通報義務もそうだ。そうすると加害を言葉にする作業は保守的になり、きちんと加害が語られなくなる。

被害であれ加害であれ、そして不具合としての行動化であれ、それらには適切な言葉が欲しい。被害の声は聞こえにくく、加害の声は消失され、中和化されやすく、行動化の声は混沌としている。中井さんのいじめの体験論のように整序された言葉ばかりではない。語る側にも力は要るし、それを聞く側にも力が要る。両者は相関して発達する。そして何よりも聞くことと語ることが二項的にあるだけではないことへの理解も欲しい。そのあいだのコミュニケーションの仕方は多様にあるはずだ。そのことを以下において考えてみたい。

4. ナラティブのかたち-多様なコミュニケーション・モードの研究

聞く側と話す側、調査する者とされる者、支援と被支援という二項対立的な図式ではないほうがいい。そこでコミュニケーションのかたちとしてみると興味深い事例がいくつかある。自生的に形成され、意図的にひきだされ、協働しつつ展開されているコミュニケーションの現場があり、それらはとても面白いと思う。

一つは薬物依存からの回復をめざすダルクの取り組みにみられるコミュニケーションの独特さである。一般にアディクションからの離脱をめざす自助グループの会話は特徴的なモードをもっている。自ら語り出すというモードが設定されているのでこの特徴をみってみる。

二つは名づけの変更を試みる実践がある。ラベルをめぐる葛藤を意識的に取り入れ、「名乗り返す」という試みがある。ここでは顔等にあざのある人たちが自らをユニークフェイスと名乗ることに注目してみたい。この発想はいずれ自らを不登校とは名付けないことへの示唆となるだろう。

三つはプライバシーのもつ起爆力やエネルギーをひきだす多様なチャンネルを組織することで問題解決に向かう経路がありうることをみみたい。ここでは映像化するという選択肢をみってみる。

以下の話題は、立命館大学人間科学研究所において実施した公開連続企画『ケア新時代シリーズ第3期-当事者のまなざし』（2003年3月発行）として記録されているものがもとになっている。これは「学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ」の一環である。多様な当事者研究の方々を招いて話を聞いた記録である。自由に閲覧できる。

<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/93>

1) 主客を入れ替える対話-脱アディクションのコミュニケーション

① 関係性を組み替える-コミュニケーション論的転回としての回復

問いの仕方を変えてみる。人生の意味の理解についてはヴィクトール・フランクルの問いかけが有名だ。問い方のコペルニクス的転回である。主語を入れ替える。「私はもはや人生から期待すべき何ももっていないのだ」、そう言って生きることをやめようとした人に彼は語る。他人によって取り替えられないかけがえのないあなたを待っている仕事、待っていてくれる、愛する人がいる。人生はあなたからあるものを期待していると。フランクルは、絶望のなかの収容所において、生きるための「なぜ」を常に問わなければならなかった。目的が無くなったとたん存在の意味も消えてしまう事態の中に生きていた。抛り所が無くなった人は死に至る。生きのびるために、人生の意味の問い方を反転させた。「人生から何をわれわれは期待できるか」が問題なのではなくて、「人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」と。「私が人生の意味を問う」のではなくて、「私自身が人生から問われたもの」として体験される。「人生は、私に毎日毎時間を提出し、私はその問いに、詮索や口先だけでなく、正しい行為によって応答しなければならない。『われわれ』『私』と『人生』を入れ替えることで、まったく違う世界を出現させた」（『それでも人生にイエスと言う』V.E. フランクル、春秋社、1993年）。

自己が中心となったコミュニケーションに囚われていることからの脱却を図り、主客の関係を反転させると、生きるべく呼びかけられたかたちになる。愛する人、待つ人たちと自己の布置を置き換えていくことで見えてくるのは、関係性のなかに生きる自己である。同じような転回や反転を活かしたコミュニケーションの場に身を投じることで回復をめざす取り組みがある。依存症的な人生からの転換をめざす民間のリハビリグループである「ダルク」は当事者組織である。セルフヘルプグループ活動だ。このコミュニケーション・モードは独特である。

「Just for Today (ただひたすら今日のために)」やハイヤーパワーなどの独特のコミュニケーションの仕方がある。そのためにミーティングが欠かせない。ひたすらその実践を行う過程で新しい思考の様式と行動の型が形成される。一種のセルフコントロールスキルのようなコミュニケーション・モードといえる。それはそれ

までの薬物依存者としての実践とは異なるやり方である。

この過程で、依存者としての自己がより可視化され、自己規定を行うこととなる。一人ひとりがダルクに至る経過、薬物依存体験はそれぞれ個性的だが、共通している体験のフレームがある。それは、医療的な解毒プログラムを経て、薬物を使用せずに日常生活を送ることができるように徐々に回復していく過程に見出せるコミュニケーション的な転回である。薬物を使用しなくなるということは回復の端緒でしかないということが理解できる。

ダルクの回復のプログラムは AA(アルコールクス・アノニマス:アルコール依存症者の自助グループ)の「十二ステッププログラム」をもとにつくられている。ダルクの創設者、近藤恒夫氏が『薬物依存を越えて一回復と再生へのプログラム』(海拓社)のなかで紹介している。それは次のようだ。

- (1) われわれは薬物依存に対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
- (2) われわれは自分より偉大な力が、われわれを正気(健康的な生き方)に戻してくれると信じるようになった。
- (3) われわれの意志と生命を、自分で理解している神、ハイヤーパワーの配慮にゆだねる決心をした。
- (4) 探し求め、恐れることなく、生きてきたことの棚卸表をつくった。
- (5) 神に対し、自分自身に対して、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
- (6) これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
- (7) 自分の短所を変えてください、と謙虚に神に求めた。
- (8) われわれが傷つけたすべての人の表をつくり、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
- (9) その人たち、または他の人々を傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。

- (10) 自分の生き方の棚卸を実行しつづけ、誤ったときに直ちに認めた。
- (11) 自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
- (12) これらのステップを経た結果、霊的に目覚めこの話を薬物依存者に伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。

「自我、コントロール欲求、自分自身の内部のパワーを求める欲求を縮小していき、その分を自分とハイヤーパワーの関係に置き換えながらストレスを小さくする生き方に変えていくこと」(近藤、同上書)としてこの「十二ステップ」の意味が指摘されている。

ハイヤーパワーの活用は、それまでの薬物依存との闘いをめぐる物語を変化させるコミュニケーション技法となっている。ナラティブのモードを変えて、行動変容に導く。神とかハイヤーパワーとかという言葉が使われているが、特定の宗教ではない。超越的なものを想定し、そこに依存し、決定を委ね、対話することで可能となる自己再構築のコミュニケーションが「十二ステップ」に埋め込まれている。

② コミュニケーションとシステム

このハイヤーパワーの活用はセルフヘルプのコミュニケーション論的転回の典型的なかたちを成している。その意義を説いたのは、コミュニケーション論をもとにしてアルコール依存症者の自己概念を分析したグレゴリー・ベイトソンである。ベイトソンは「降伏のコミュニケーションとしての語り」といい、大要、次のように脱依存症へのコミュニケーション論的変容過程を特徴づけた。

酔いが醒めに対する矯正の機能を果たしている、依存者自身が、醒めているあいだは自分の「弱さ」にこそ問題があるのだと一般に考えている。彼は「わが魂の指令官になれる」と信じている。意識レベルでの彼の自己はアルコールの人格化との泥沼の戦いに巻き込まれている。酒との戦いという神話、つまりアルコールとは戦えないと認めること、ようするに降伏が必要

なのだ。それはいわゆる「底つき感」である。アルコール依存症者の自己全体がアルコール依存パーソナリティーなのである。そういう自己がアルコール依存と戦うということは自己矛盾である。「あなたの意志で直そうとすることは靴ひもを引っ張ってあなた自身を持ち上げようとするのと同じだ」とたとえることができるという。

そこで、ハイパーパワーが用いられる。われわれより大きな力<カ>がわれわれを正気に引き戻してくれるという「大きな力の顕現」により「意志の力」という神話が崩れる。自己という独立した行為者があって、それが独立した対象に、独立した目的を持った行為をなすのだと信じる西洋の人間、つまり西洋に特徴的な自己の観念が回復の阻害となっている。アルコール依存者に染みついたプライドである。だから「俺にはできない」ということが受容できない。俺は素面であることができるということに駆り出されている状態である。自己へのチャレンジとして禁酒を継続することに耽溺しているということになってしまう。アルコール依存症的自己とは、酒との交わりを自己の外側にセットし、自分が飲酒に抵抗するという構図に納めてしまう。

脱アルコールへのセラピーとは、このシークエンスの変化を促すことがメインとなる。これは一種の「自己システムの修正」というセラピーである。正のフィードバックサーキットは、破滅への欲望となるが、「大きな力への降伏」をもたらすことで変化が可能となる。自己よりも大きな力があることを認める。しかし、それは特定の宗教という大きな力ではなくて、各自それぞれに理解する神となっている、つまり私の神である（「『自己』なるもののサイバネティックス-アルコール依存症の理論『精神の生態学』佐藤良明訳、思索社）。

こうしたハイパーパワーを活用し、グループを成して確認していく日常的な実践を脱依存症のグループワークは展開している。これは、新しい認知と行動を形成するためのフレームとなっている。ベイトソンはアルコールに関してこれを論じたが、依存という嗜癖の悪循環に陥っている事例一般については共通する。こうした自立した個人の神話は西欧だけではない。個として立つことを強いられる社会の生きづらさがここにある。その強い個人をのりこえるために

も、援助を求めること、弱い面があること、関係のなかに生きること等を認める回路を開きたい。そうした認知の仕方、行動の選択の幅を広げることがこのコミュニケーションの場では実践されている。そうした場では人はそのフレームのなかで自生的に語り出す。聞き出すのではなく、語り出す場の構成が大切となる。

このことは不登校の生徒からの「問い返し」が認定フリースクールという「場」の力によって可能となっていることと関わる。コミュニケーションの場や環境のあり方が人の変化を可能とさせる。語り方の変化が自己理解や他者関係を変容させていく。

2) まなざしと外見-名乗り方を変える

問題であるとする定義は意味づける力のことである。社会病理現象には名指すことが含まれる。医学が何かを病理である、障害であると定義する診断とは異なるのが心理、福祉、教育の分野における定義づけである。これはラベルとして負の記号作用を果たし、当人の自己評価を下げていく。烙印である。この行為をラベリングという。「問い返し」はこの意味でも重要な行為であることがわかる。その延長上に名乗り方を変えるということがある。

ユニークフェイスという言い方で外見や容貌になんらかのハンディをもつ人たちの行きにくさを乗り越えようとする取り組みがある。外見こそが問題だというリアルでストレートかつ自明なことへの問題提起を行っているグループだ。外見は、欺瞞、無視、うさわ、排除、蔑視、儀礼的無関心など、私たちが人に対して抱く美醜の感覚、敬意と排除、本音と建前などが飛び交う社交のインターフェイスである。そのインターフェイスは戦場のようなものである。これは「まなざしの地獄」となる。こうした状況に対して、ジロジロ見られる顔や外見をもつ人たちは自らをユニークフェイスと名づけ、セルフヘルプの実践をはじめた。

「顔や体の機能に問題があってもなくても、遺伝、病気、外傷などが原因で明らかに目立つ容貌である人とその家族」を対象にして「顔のNPO」と称した当事者グループを結成した。顔面や身体の表面に疾患や外傷のある当事者とその家族は「社会によく知られた問題の当事者と

は異なり、社会から差別、偏見、蔑視にさらされている」、「ユニークフェイスの人は、侮辱の対象としての関心、凝視する対象としての関心、そして、どうやって接したらいいのかわからない人が無視をするという対応に疲れ果てています」と言う。その上で、「好意ある無関心」という言葉を紹介し、どう接すればよいのかを提案する。(『知っていますか?ユニークフェイス一問一答』松本学ほか編、解放出版社)。

さらに、「常に自分は他者から見られている意識と強迫観念に襲われている」、「社会が自分を避けていく感覚、つまり回避」、「なんだ、あいつはという敵意を感じる」(『顔面漂流記-アザをもつジャーナリスト』かもがわ出版)という心理状態に慢性的におかれていることの苦しさを語りはじめた。

ユニークフェイスとして前景化すればするほど、私たちは日常生活において、「好意ある無関心」を実践しなければならない場面に遭遇する。『ジロジロみないで-“普通の顔”を喪った9人の物語-』(扶桑社)にはユニークフェイスな人たちの写真が数多く掲載されている。罵られ、いじめられ、差別された体験記も添えられている。そのなかに、「髪の毛がない“事実”を“個性”へと変えた」という女性の話がある。彼女は全身脱毛だった。その体験が詳述されている。デートの最中、彼の手が髪の毛に伸びてくるとカツラだとバレないように彼の手を払ったこと、眉毛がないことがバレないように顔を寄せ合っても顔をそむけたこと、裸を見られないように下着をはいたままセックスした話などの痛々しい「取り繕い努力」が語られている。相互作用の社会学で言う「パッシング」の姿だ。ようやくカツラ・カウンセラーとして体毛のないことを活かした仕事をはじめた。3ヶ月先までも予約が入っていたという彼女は、しかしその人生が上向きはじめた矢先、その上り坂の途中で自殺をしたという。こころの中にある傷の深さなのだろう。

こうして、ユニークフェイスとして名乗り変えることで、癒すことが必要な、世に明かしたくない過去が「生きられた経験」として定義され直していく。

この取り組みから、人間の相互作用という社会行動を観察し、外見の機能に注目したアービング・ゴフマンという社会学者の仕事が想起さ

れる。ゴフマンは、「外面は一種の〈集合表象〉となり、自立的な一個の事実となる」という(『行為と演技-日常生活における自己呈示』誠信書房)。ゴフマンはユニークフェイス、つまり顔だけに論を絞っているわけではなく、行動、態度、しぐさ、役割など幅広く外面や外見を扱っている。内面やこころという見えないものではなくて、行動や外見という見えるものに焦点をあてて社会生活の特質を記述している。

『スティグマの社会学』(せりか書房)では、さらに直裁にこの顔という外見にかかわる対象をも把握している。「スティグマとは属性ではなくて関係を表現する言葉」だと定義している。ゴフマンはスティグマ体験を集め、記述し、言葉を与えた。たとえば、傷をもつ人と対面したときの「気づまり」や「儀礼的な無関心」を指摘する。「情報操作」、「パッシング(取り繕い)」、「侮辱と信頼喪失に晒されている傷つきやすい自己」等、相互作用における微視的現実言葉を与えていった。「自己は呈示される場面から生じる劇的効果 **dramatic effect** である」とする演技論的な社会的相互作用分析をおこない、外見という変数を独自の分析対象として取り出した。

こうした一連の研究やユニークフェイスの実践から、外見ではなくて中身だという意識の虚構性が暴かれ、結局、見た目を気にして生きる社会行動のリアルな側面が露わにされていく。隠蔽された困難の発見はこうした作業とともに行われてきた。

もちろん、困難ばかりがあるわけでない。外見に注目した社会学や演技論的なアプローチは、装うことがもつ積極性の方へと関心をむけることとなる。メイクアップやリハビリメイク等の可能性だ。隠すのではなくて、活かす方策や表出することの肯定的な意義がひきだされていく。リハビリメイクを施す女性が体験を語る。その実践の役割が重要な意味を帯びる。自分をディスプレイすることで関係性が変わり、内面が変わる姿のリアルさが説得的だ。心ばかりが肥大化し、何かというと心のケアや内面の充実が語られていきがちな対人援助への、一つの問題提起だと思う。障害の問題も外見の異形性をともなうから「まなごしの地獄」的になっていく。ジロジロ見ないで普通に接する家族や友人や職場でのいきいきとした日常が先の写真集には表

現されている。あたりまえに共在できることがめざされている。ユニークフェイスな人々との出会いから学ぶことが多い。

いじめの政治学にならっていえば、顔と外見をめぐる政治学である。内面さえ豊かであればいいということのもつ嘘っぽさを容赦なく指摘する。波風の立つ言い方だ。学歴、学校名、名誉、肩書き、見てくれ、身につけているもの等、広い意味での外見にこだわって生きていることを暴く。起爆力を秘めた「問い返し」といえるだろう。そうした波風をとおした関係づけの再構築のためのコミュニケーションの仕方だと思う。名乗り方を変えてみることは当事者研究のなかでも重要なポイントとなっている。

こうなると、「不登校の政治学」が成り立ち、近い将来にその名づけが変更されていくべきだといえる。何故なら、そもそも以前にはなかった言葉だからである。学校恐怖症、登校拒否、長期欠席、不就学等と変遷してきた。そして学習の継続が保証できれば教育を受ける権利は実現できるのだから、課題はこの学習の持続である。そうなると学びの場の構築ができればよいといえる。名づけの変更は基本的な課題の明確化があればよいことを意味している。

3) プライバシーは力を秘めている-聞く者の責任-

「問い返し」は公的領域から追いやられた秘密、つまりプライベートな領域から発せられる。問い返された側は揺さぶられる。それは常識を問い直す力になる。関係性を組み換える力ともなる。それに手を貸すのがカウンセリングだといえる。言葉をとおしてプライベートなものを対象にして整理が行われ、必要な事項については社会の課題として再帰させることが相談したものの責務となる。守秘の義務は閉ざすことではない。

時に当事者の表現はこの関係を尻目に自由奔放に展開されていく。だから当事者研究として自由な表現をさらに高次に組織化することに関心がもたれ、ユニークな取り組みがたくさんあり、それらが治療的で回復的に機能する。たとえば映像。対話と回復・和解のためにドキュメントが言葉のようになって関係者の感情を逆なでしながらも関係を癒やしていく。

「ファザーレス/父なき時代」は、村石雅也さんの、1997年の日本映画学校卒業作品だ。冒頭から、執拗なほど反復される自傷行為、中年同性愛者とのゆきずりのセックス、つきあっている女性に殴られ血を流す場面が矢継ぎ早に描かれている。観ている者の心をざわつかせる。自分の不安定さを探るため、幼い頃の育ちを追体験し、再確認するように育った家族の深奥へとカメラが向けられていく。幼い頃に離婚した親、母が再婚した義父との確執、実父との再会などを記録していく。

その映画学校の校長でもある佐藤忠男さんは『映画の真実—スクリーンは何を映してきたか—』(中公新書)のなかで「ドキュメンタリーとデモクラシー」と題する章を起こしている。これはこの映画を評したものだ。佐藤氏はこの映画を「セルフセラピー」だと特徴づけている。自らの人生の課題を整理し、実父との和解的な対話や再会へと至る過程が描かれているからだ。そのドキュメント手法は痛々しいけれどもどこか安心できる修復と和解の物語としてみるができる。その過程をデモクラシーと名付けたことは対人関係の次元において社会のテーマを位置づけようとする適切な表現だと思った。

同じ日本映画学校の卒業作品として制作された映画「home」は、弟がひきこもりの兄を映している。兄は地に足つかない、外の世界に出ることの恐怖を「3センチ上の世界」と表現し、ひきこもっていた7年間の記録を日記として公開している。兄の日記は饒舌だ。ひきこもりの当事者としての発言だからだ。回顧的な後からの意味づけでなく、渦中にある時のリアルな声が新鮮である。ひきこもりと称されているけれども、その生きられた世界が濃密な時間として記述されている。

私は「home」を何度か観た。映画のなかに映し出された兄の部屋にある膨大な映画のビデオテープの数々が印象に残る。兄は映画が好きだということにこの「home」の核心のひとつがあると感じた。立命館大学で映画を上映し、映画を制作した弟とひきこもっていた兄を招いて話をきいたことがある。その時に兄が学生たちに訴えた。映画のラストでようやく家を出た兄に安堵した聴衆に向けた刃であった。

「ひきこもりの主人公は車で家を飛び出た。しかし、その主人公はちっとも胸をなでおろし

てなんかいないし、その結末に〈ハッピーエンド〉を読みとる観客に腹を立てている。・・・ちゃんと観て欲しかった。あの空っぽのガレージを。これが、今現在、そして、これからも続く私の不安と恐怖なんだ」、「『ひきこもり』当事者とその周囲の人々の間には、ある絶望的な意識の差がある。そして、その意識の差異の提示はあらゆる場面で行われうるべきだ」と語る。

「ひきこもりのリアルを伝える。手法はあっぱれだ。映像好きの私は『いいものってくれるなら』という心の隙間があった。学生映画特有の予定調和のものなら握りつぶしていたところだ。」と「home」のパンフレット(ボックスオフィス発行)で兄が語っている。映画制作のためにカメラを向け、カメラにむけて語ることでリアルが構成され、いやがおうにもひきこもりをなんとかしたいという弟の書いたシナリオが実行されていくという、映画のなかの映画のようにして兄の主人公性がひきだされている。兄は「表現欲」について語っている。「映画に対する憧れ」があったと言う。そうなるとこの映画を完結させるためにその主人公は家を出ることを余儀なくされる。映画のなかの映画の主人公を演じきったのだ。カメラの力である。でもそれは兄の欲望をよく理解していたからできたことでもある。ドキュメントとはいえ、それは映画としての虚構性をもつ。弟はこの兄の表現欲に棹を差しながら、うまい具合に(もちろん予定調和ではなく)、家族関係再編に向けた変化へのカーブを描いた。表現欲という主人公のエネルギーを活用したうまい映画だと思った。

しかし兄は厳しい。兄はトークのなかで「共犯関係」という言葉を用いて観る者の、視線と感情のポジショナリティを問うたのだ。兄がひきこもりから家をでてハッピーエンドを感じ、それに安堵したあなたこそがひきこもりへと人を追い立てる者である、だからそのことは感情的に共犯性を帯びているのだと。その感情の持ち方自体を変えるべきだという。なるほどと感じいった。

二つの映画を観ながら原一男氏の「ドキュメンタリー論」を思い出した。それはプライバシーへの侵入としての記録映画の意義についての語りである。

「プライバシーって、個々人の価値観とか感性とかいうふうに言うけれど、そういう個々人

がもっている感じ方、感性をよく見ていくと、自己矛盾的にその中に制度的なものが非常に入っているというふうになってしまう。だからこちらがその制度的なものに対して、カメラを持って打って出ようとするときに、ターゲットはやっぱり個人の感じ方の世界へどうしても向かっていく」、それで、「この結果というか必然として、プライバシーの領域にどうしても踏み込まざるを得ない」、「プライバシーって言っている部分の中に、僕らが抱えている矛盾みたいなものがかかなり含まれているんじゃないかと思う」、「やっぱり生身の人間の中で見つけ出して引きずり出したい」、「僕らがカメラを持って他人の中に踏み込んでいったとき、被写体のほうも自分で予測もしていなかったようなものが出ちゃったりして、その人が積み上げてきた、今日まで平和でやってきたものがガラガラと崩れるんじゃないかと思われるかもしれない。しかし、残念ながらそう簡単には崩れない。・・・それほどにやっぱり積み上げてきたものは強烈なはずなんです」(原一男『踏み越えるカメラ—わが方法、アクションドキュメンタリー—』フィルムアート社)。

対人援助はプライベートな領域に踏み込む。聞く側はそうしたことをしている。ドキュメンタリーやカメラとよく似た機能を有している。プライバシー、私的なこと、秘密にしておきたいこと、語りたくないこと、感じ方や安堵の仕方等、すべてに社会が入り込んでいる。それを開くとみたくないものまでみえてくる。観る者の責任もあるし、観る者の見方も問われる。プライベートなことはそれほどまでに奥まったところで起爆性を秘めている。芸術の多くはそれらのあるフレームのなかで表現する。臨床や援助もまた同じように取り出していく。聞いた者の責任が発生する。社会のもつ課題へと応答させなければならない。だから対人援助と民主主義という主題の定式化はどうしても必要だ。佐藤忠男さんの指摘はこの意味でも見識だといえる。

5. 協働する対話へ—対人援助と民主主義

なお冒頭の院生は考え続けている。学校に通っていたことの意味について。不登校という言

い方の妥当性も再考している。私が彼に問うたことは、不登校の「校」とは何か、何からの不登校なのか、不登校を微分し、そのように観念され、総称されている事態を解体していくべきことを。概念としての不登校があまりにも肥大化しているし、それに寄りかかっているは見えないものがあることをこそ調べるべきだと。不登校の子ども自身も社会のもつ、既製の物語に染まっているかもしれない。そうすると世間の持つ自立の物語に即して回復を描くことになる。自己を責めることもある。自尊心も低下する。せつかくの不登校経験を活かすことがないと「負の経験」として物語られていくだけだ。既存の物語に回収されてしまう。

ポジショナリティ論は対人援助と民主主義の関係を問うていると考える。これが社会臨床の意味である。中井久夫さんのいじめの論考が政治学と名付けられたことは必然だった。仲間関係における暴力のもつ破壊性を表現し、周囲が何を考えなければならないかをつきつけた。いじめの罪深さに気づく。「サイコ-ポリティクス psycho-politics」という相がうまく切り取られているので、そこには心理的、感情的な暴力の深刻さが浮かび上がっている。この言葉、狭義には精神医療や精神保健をめぐる政治=政策動向を意味するが、それだけではなくて、ミクロな対人関係のなかに宿るパワーとポリティクスのことも意味するのだと理解すると、考えるべき諸点は拡大する。たとえば、ひきこもりの政治学、不登校の政治学、子ども虐待の政治学、薬物依存の政治学、そしてトラウマの政治学と無限に続く。

ここで述べてきたポジショナリティという言葉の必要性を浮かび上がらせたその発端は、不登校経験のある生徒の「問い返し」だった。そのことをひきうける側にも力とエネルギーが要る。その後の院生の調査は協働した対話のようにすすんでいく。その調査はつくられた自分を再構成する作業のようでもある。ここでみてきたコミュニケーションの場は、その院生が調査する認定フリースクールという学びの場である。その場は、生徒たちにとっては学習を継続する場として、不登校ではない世界と関係の場としてうまく機能している。

この場に通いながら彼は不登校の生徒に教えられ、いずれはその不登校という言葉さえ解

体していくことになる試練を与えられたといえる。そのためにも、ダルクのような新しいコミュニケーション・モードをもつ場の創造、ユニークフェイスのような名づけ(ラベル)の変更、プライベートなことの開示による日常の変更(持続的な学習の場の保証)について学ぶべきなのだろう。こうして「問い返し」への応答ができていく。

ここに通う生徒たちはすでに不登校児ではなく、学習者として立ちあらわれている。不登校経験者として育っている。さらに環境も変化している。認定フリースクールができ、単位制高校・通信制高校も整備され、これまで存在している適応指導教室や保健室登校だけではない選択肢が増えている。さらに出身学校(小中学)で不登校であったことを志願・入学条件とした私立中学も存在するようになった(たとえば学校法人東京シューレ学園が経営する「東京シューレ葛飾中学」等)。不登校者支援をめぐる新たな統合の理論が求められているといえる。持続する学習者としての主体の形成を支援する不登校支援論へと視点の転換も求められている。

こうした現状からすると、不登校の研究において、その内包と外延が不明確になりつつあるといえる。ポジショナリティ論をとおした「対人援助と民主主義」の考察を踏まえると、彼の研究の隠れたテーマは「さよなら不登校」「もうひとつのキャリア形成」「持続的学習者形成」「学びの多様性保障」等ではないかと提案している。

中村正(なかむら ただし)
社会病理学・臨床社会学・臨床社会論

2014年11月25日受理